

## 「鉱物の和名」

国立科学博物館 地学研究部 宮脇 律郎

意外に思う人も少なくないようですが、鉱物にも種が定義され、それぞれに種名があり、模式標本（タイプ標本）があります。国際的に通用する種名は、その種の特徴、産地名、貢献のあった人物名などに因み、「石」を意味する“ite”で結ぶのが原則です。新種としての申請と同時に、国際鉱物学連合の新鉱物・命名・分類委員会で審査されます。

日本語の鉱物名（和名）は、「鉱物」が科学的に定義されるより前には中国から、次いで科学とともに欧米からもたらされた鉱物名の訳名として使われてきていますが、国際委員会の審査対象ではなく、時代とともに変化し、今は全く使われないものや、全く定義の変ったものもあります。しかし、ことばの意味が曖昧になると、正確な情報交換や知識の共有が妨げられるので、学術分野では、名称の混迷は大問題になりかねません。

鉱物和名については、学名に対応しながら、透明鉱物は「○○石」、不透明鉱物は「△△鉱」と記すよう、日本鉱物学会が指針を発表してから60年が過ぎました。近年、これとは別に学名をそのままカタカナで表記することが増え、例えば、「燐灰石」と「アパタイト」が混用される例もでてきています。

鉱物名に限らず、日本語の論文や総説でも、新聞や雑誌の記事のように、カタカナ表記があふれ、意味が読み取り難い文章が多くなったように感じます。正しい日本語表記を失った学問は、日本語での伝承（教育）を失うのではないかと心配です。

科博メールマガジンより